

安倍晴明の見た天変



はじめに

安倍晴明（921～1005）といえば陰陽師・妖術師としてのイメージが定着していますが、実は千年前の京の都で活躍した天文学者です。彼の役職「天文博士」とは星のことをよく知っている先生という呼び名ではなく、れっきとした太政官の官職名で、彼は中級国家公務員なのです。紫式部や清少納言たちと同時代ですから御所のどこかで出会うこともあったでしょう。彼の前半生はなぞに包まれていて、ようやく 40 歳で「天文得業生」としてデビューします。これは優秀な天文生に与えられる称号です。52 歳で天文博士となってからは多忙な業務をこなしていたようです。彼の本来の役目は天文現象を克明に記録し、日月食・彗星・流星など変わったことがあれば直ちに内裏へ奏上することです。「天変」に敏感な朝廷にとって重要な仕事でした。陰陽寮の天文分野では約 20 名のメンバーで観測当番をこなしていたそうですから、それだけでも相当大変な仕事だったでしょう。さらに昼の主な仕事は各種公式行事への参加、天皇・皇族・貴族のための占いや祈祷・・・などなどです。晩年は藤原道長（966～1027）の信任が厚く、80 歳で従四位下、82 歳で大膳太夫・左京権太夫に任じられています。そして没年まで諸行事を行うなど現役として活動しています。

道長自筆の日記である『御堂関白記』（国宝）には、長保六年二月十九日（ユリウス暦で 1004 年 3 月 12 日）に道長が 84 歳の晴明を伴って新しく作る法華三昧堂の土地探しに宇治木幡に行ったこと、その日は「癸酉の日曜」と記されています。この日の干支と曜日は、実際に計算して確認されました。御堂関白記は陰陽師の作った具注暦に道長が書き込んだもので、そこには干支・二十四節気・吉凶の占いはもちろん、日月火水木金土までが書いてあります。曜日が輸入されたのは決して明治になってからではなく、9 世紀初に空海（774～835）が唐から持ち帰ったもので、藤原時代には密教行事だけでなく広く貴族間に使われていたようです。早春の日曜日に宇治に出かけた帰りには、どこかで梅花見物でも楽しんだのではないのでしょうか？

彼が在任中の主な天文現象としては

歳星天変	(973)
皆既日食	(975)
火星大接近	(978)
花山帝退位の天変	(986)
熒惑星事件	(989)
大彗星出現	(989)
大流星雨出現	(967, 1002)



などがあります。975 年の日食はわが国初めての皆既日食の記録で、このときには恩赦が、また大彗星出現のときには改元が行われているほど大事件でした。また大流星雨とは毎年 11 月中旬に起こる「しし座流星雨」のことです。

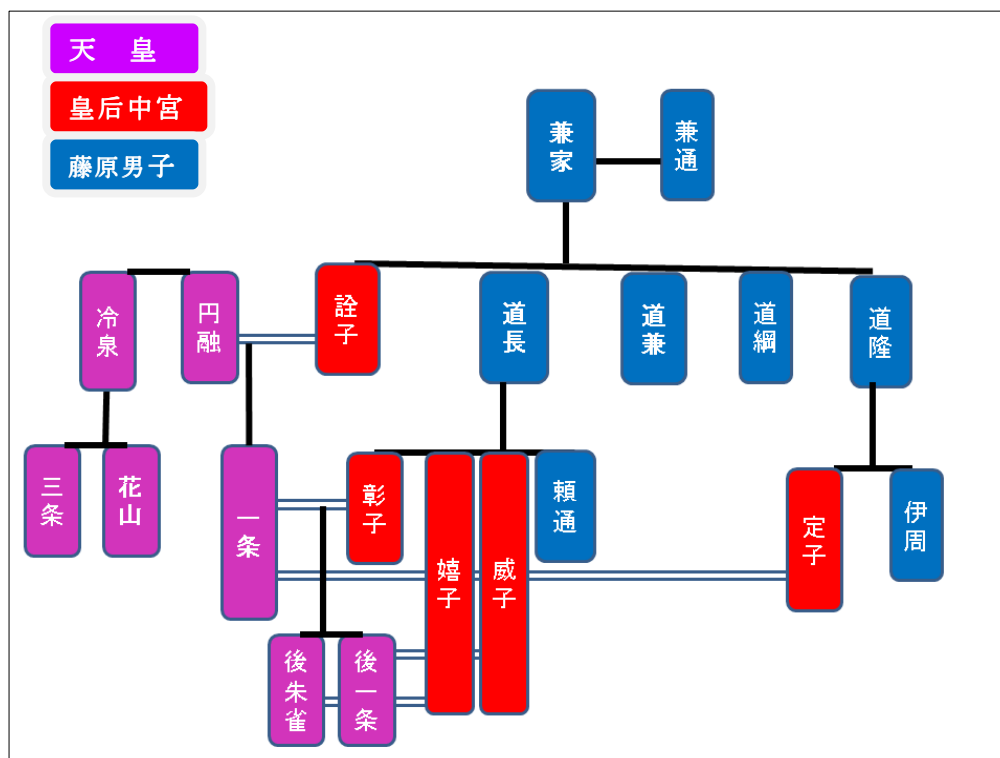
これらの天象に晴明が直接関与していたという記録はありませんが、当時の星空を再現して彼の足跡を辿ってみましょう。

花山帝退位の天変

帝おりさせたまふと
見ゆる天変ありつるが、
すでになりにけりと見
ゆるかな・・・。

左の文章は『大鏡』の中の有名な件で、高校の古文の教科書にも載っていますからほとんどの人は眼にしたはずです。寛和二年六月二十二日(ユリウス暦では 986 年 7 月 31 日)の深夜、比類なき陰陽師である安倍晴明が「帝の退位を示すような天変があったが、事は既に終わってしまったようだ。」と叫びました。この夜、花山天皇は藤原道兼にだまされて退位・出家してしまうのですが、御所から花山寺に行く途中、晴明の家の前を通った時にその声を聞いたと記されています。帝の退位を示す天変とは、一体何だったのでしょうか？

ころは平安中期、平将門・藤原純友の乱（935～941）も静まり、戦乱もなく死刑も行われず一見平和な時代でした。橘氏・伴氏・菅原氏・紀氏・源氏（皇族）など有力な他氏を排斥し、朝廷の高級官僚を独占した藤原氏は陰謀による仲間同士の骨肉の争いをうち広げていきます。そして「乱」にも「変」にもよらず、摂関政治を確立していった総仕上げが「花山帝退位事件」でした。この事件を企画・総指揮をする藤原兼家（929～990）は争っていた兄の兼通（925～977）の没後右大臣になっていましたが、



娘詮子が円融天皇との間に生んだ懐仁（やすひと）親王を帝位に就けるため、花山天皇（968～1008：在位 984～986）を退位させようと企みます。彼には道隆，道綱，道兼，道長という息子がいますが，ここで暗躍するのは三男道兼です。帝はまだ 19 歳，とても退位する歳ではありませんが，寵愛していた女御をなくし失意の底にあったの

に乗じて、道兼は帝と一緒に出家しようといひます。夜半、帝を御所から連れ出し、東山の花山寺（元慶寺：山科区北花山河原町）に着きますが、いざ髪を剃る直前になって両親と最後の別れをするからといって寺を抜け出しそのまま帰ってきませんでした。すでに頭を丸めてしまった花山法皇、その時になってやっとだまされたことに気づいたけれど、もはや遅し。翌朝 7 歳の懷仁親王は即位して一条天皇となり、兼家は念願の外祖父となり、摂政に就任します。これは兼家の陰謀クーデターといわれますが、むしろ一滴の血も流さずに象徴天皇制を確立したと評価してもいいのではないのでしょうか。兼家の没後、道隆さらに道兼が継ぎますが、2 人とも短期間で病没、特に道兼はわずか 11 日の在任でした。そしてやがて世は道長の時代に移っていきます。ちなみに兼家の 4 人の息子のうち道綱だけは摂政・関白になれず右大将とまりの人生を送りますが、彼の母は兼家の妻の中で最も有名で、『蜻蛉日記』を著わしたり、また百人一首にも激情的な歌を残しています。一条天皇の皇后である定子（道隆の娘）には清少納言が、中宮である彰子（道長の娘）には紫式部が仕えていました。さらに和泉式部、伊勢大輔などを加え、あまたの才女たちが活躍した時代です。華やかな王朝文化が栄える前夜には上記のような凄惨な事件があり、それには晴明も関与していたようです。

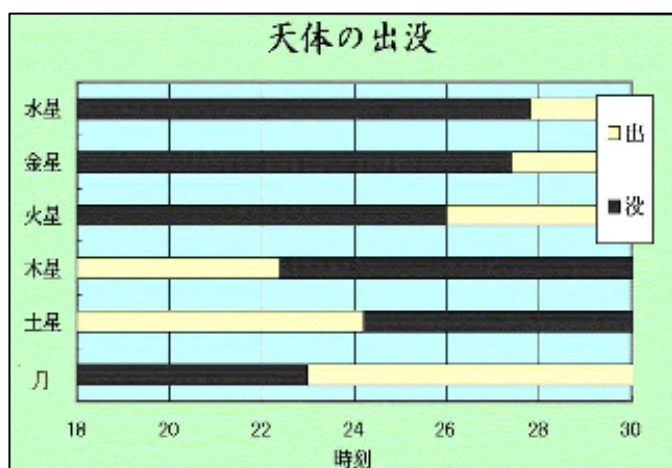
この天変について斎藤国治氏は木星がてんびん座 α 星（2.75 等星）へ犯を起こしたことだと述べています[2][3]。犯とは天体同士の異常接近ですが、食のように重なることではありません。実際に計算した結果、木星は 7 月末に、てんびん座 α 星の約 0.5° 北にあることがわかります。当日この 2 星は午後 10 時半ころ南西の空に沈むまではこの犯が見えたでしょう。晴明はこの天変を内裏へ急告しようとしたけど、すでに退位後のことで間に合わなかった...果たしてそうなのでしょうかね？

大鏡の上記の文章のもう少し前を読んでみると、帝が御所を出ようとしたときには「有明の月のいみじう明りければ・・・月の顔にむら雲のかかりて」から出発したと書かれています。旧暦 22 日ですからほぼ下弦の月、月の出は真夜中の 12 時前、帝の夜行はその後しばらくして月に雲がかかったころですから、多分 1 時か 2 時ころです。木星はすでに沈んでしまった後、なぜ晴明は 3～4 時間も経ってから奏上せねばと言ったのでしょうか？

木星は 12 年弱で天球上を一周するので、ほぼ黄道上にあるてんびん座 α 星とはこの周期で犯を起します。

実際 974 年、962 年、950 年にも起こっています。晴明はこの時すでに 65 歳で天文に熟知していたはず、12 年前、24 年前の犯について知らなかったとは考えにくい。いやこの度の犯も前もって知っていたかも知れません。古来、中国の天文学では白道に沿って二十八宿を定め、各宿で基準になる星を距星と呼びました。そのひとつ氐宿の距星がてんびん座 α 星で、天文官にとっては重要な星です。しかしこの犯はそれほど珍しい天象とは言えません。





他に天変の可能性はないものか？深夜 1 時 2 時ころには木星・土星はすでに沈み、水星・金星・火星はまだ東の地平線下です。彼がこのとき見たものは惑星現象ではないようです。では月は？前述のようにこの日、月の出は 12 時前で翌朝までおうし座のすばるのあたりに見られます。栗田和実氏は午後 11 時ころから翌日 1 時ころまで起った月のすばるの前面通過を指摘しています。これなら帝が御所

を出て山科の花山寺に向かう途中、晴明の家の前を通り過ぎたころに良く合います。すばるといえば枕草子の一節を思い出しますが、古代から親しまれてきたこの星々を半月が隠したのです。すばる食は 2006 年から 2009 年にかけて何度か起こりましたが、実際にはすばるの星々に比べ月が明るすぎて見えにくいものです。

筆者は「木星のてんびん座 α 星への犯（前半夜の西空）」と「半月がすばるを隠す（後半夜の東空）」のどちらかを二者択一するのではなく、両方を合わせて 2 つの独断的解釈を試みました。

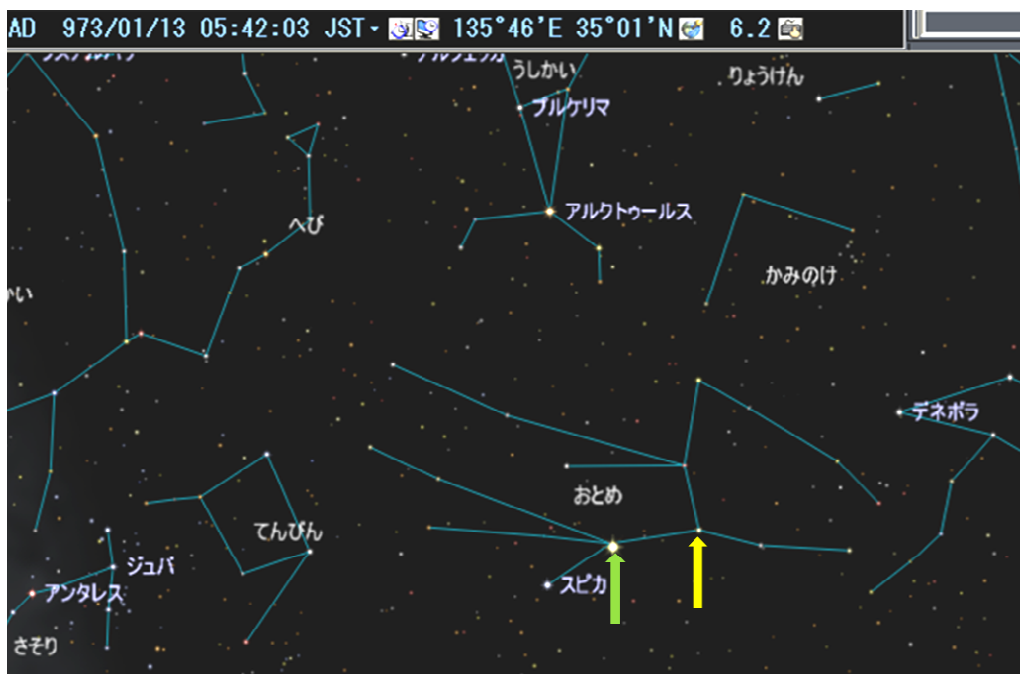
①晴明は 22 日の日没後から天体観測をしていた。その夜は雲がかかったり往来したりして観測条件は良くなかったけれど、木星の異常さに気がついて何度も辛抱強く測定した。データを整理し計算の結果、犯が起こったと確信できた時は、すでに夜半を過ぎ月も出ていた。ちょうどそのころ、すばるが月に隠されたのを見て、ことの重大さに驚き、思わず声を出した。そうならば晴明は慎重な天文博士！

②ベテラン観測家の晴明はすでに数日前から木星の犯が起ることもすばる食が起ることも予知していた。彼はこの 2 つの天変が 22 日の夜、起こることを天皇に奏上すべきなのに、藤原兼家・道兼父子に密告した。彼らは大喜びで、帝に退位を強く勧めた。帝も星のお告げならやむなしとしぶしぶ出家を決意した。晴明は予報が両方とも当たり、帝がすでに退位したのを確認してから役目上の義務として報告に行こうとした。そうならば晴明はこのクーデターの加担者！さて真相は？[6]

この事件の後、晴明は公私ともに仕事のオファーが増え、位階も昇進していきます。65 歳になってヒノキ舞台に立った、そのきっかけがこの天変だったようです。日本史にとっても彼にとっても非常に重要な事件だったと言えそうですね。

さまざまな犯(異常接近)

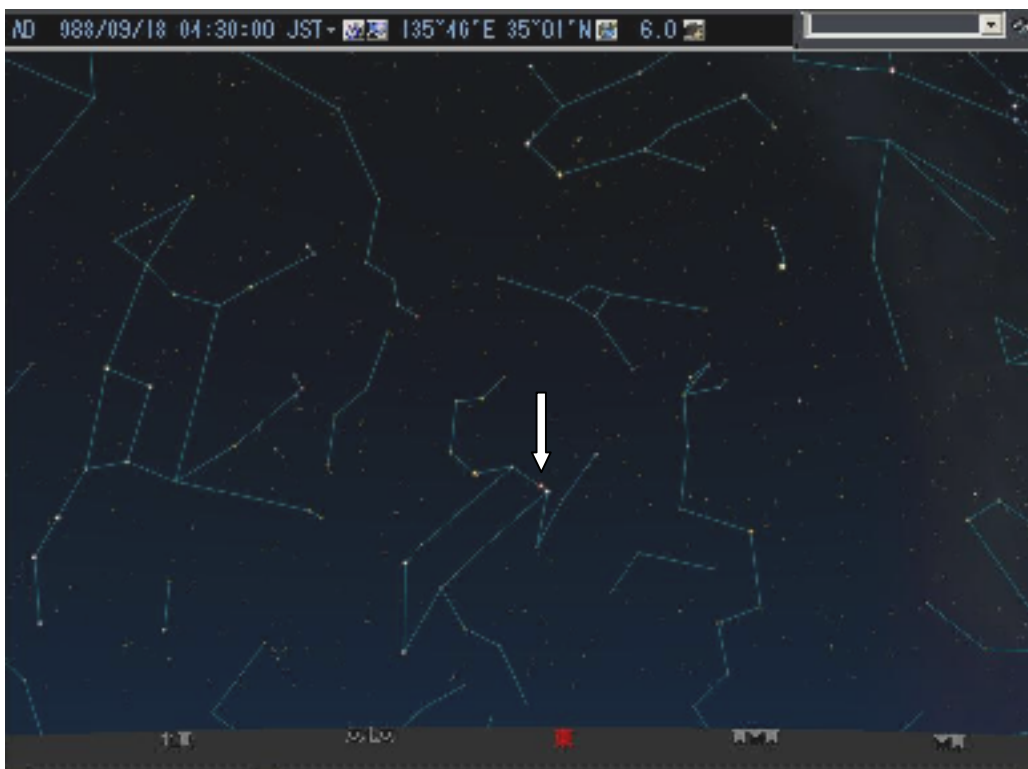
晴明が天文博士に任じられた天禄三年十二月六日(=973年1月13日)とその翌年の天禄四年一月九日(=973年2月14日),に天変による天文密奏が行われています。これは[5]に載っているだけで詳しいことはわかりませんが(密奏ですから),それに見合う天変をパソコンで計算しながら探してみましょう。このころ日月食はありませんが,前年12月から3月にかけて,金星と火星が日没後の西天で離散集合していくようすが見られます。972年12月2日にやぎ座にて接近した後,みずがめ・うお・おひつじと移っていき,973年3月25日におひつじ座で再会します。その間の1月,2月には両星は離れていましたが,異様な動きが目を引いたのかも知れません。それより高い可能性で考えられるのは木星(下図緑矢印)のおとめ座 θ 星(4等星)への犯すなわち異常接近です。972年12月に木星はおとめ座を東進(順行)中で θ 星に次第に近づいていきます。ところが翌年1月10日ころから2月初までこの星のすぐ西側でほとんど動かず停止しているように見えます。そしてその後は離れていく,すなわち西へ移動(逆行)するのです。逆行は5月中旬まで続きその時は γ 星(下図黄矢印)あたりに達します。その後はまた順行に転じますが,上記の天文密奏は時期的に木星の留(停止)に当たります。火星や木星の留は中国では紀元前から注目され記録されていた天文現象で,晴明もきっと知っていたでしょう。現在私たちは「惑星は太陽に近いものほど速く公転する」ので,上記の事件は地球の公転が木星の公転運動を追い越していくために起こる現象であるということを知っていますが,それはこれより600年後17世紀初にケプラーによって発見された法則によるもので,当時には天変と思われていました。



973年1月13日早朝の東天 左矢印はおとめ座 θ 星, 右矢印は γ 星
ステラナビゲータ8(アストロアーツ)より作成

また天延二年十二月三日（＝975年1月17日）にも天文密奏を行っています。そのころの天変としては1月15日の日食と30日の月食がありますが、日本ではこの日食は日没後で、月食は月の出の前に起こるのでともに見られないはずです。一方、金星と木星が前年末から接近していて、1月中旬には夜明け前に東南の空アンタレスの北に見られます。11日には細い月も一緒に見えたはずです。彼はこの4天体の集合を天変としたのかもしれませんが・・・もっとも流星、彗星、新星の可能性もあります。

花山帝退位事件の2年後、永延二年八月（988年9月）、熒惑星（けいわくせい：火星）が軒轅女主（けんえんじょしゅ：しし座のレグルス）を犯す（接近）ことがありました。天皇は重い物忌みに入り、天台座主の尋禅が熾盛光（しじょうこう）法を、安倍晴明が熒惑星祭を執り行うことになりました。しかし晴明は決められた日に行わなかったために、怠状（始末書）を召されたという話が『小右記』（藤原實資著：957～1046）に載っているそうです。これは晴明の失敗談として語られています[7]。ところがレグルスはほぼ黄道上にあるので、惑星と接近することは決して珍しくないことです。火星とは2年余の周期で出会い、988年9月18日の前にも986年10月12日、984年11月21日・・・にも接近しています。晴明はこれらのことを承知していて、熒惑星祭なんぞ要らないと思ったのではないのでしょうか？しかし幼帝とはいえ違勅に対して始末書だけとはずいぶん寛大な処置で、左遷降格されたようすもありません。実は摂政兼家は晴明の理を認め、2年前の返礼として軽い処分ですませたというのは筆者の勘ぐりでしょうか。

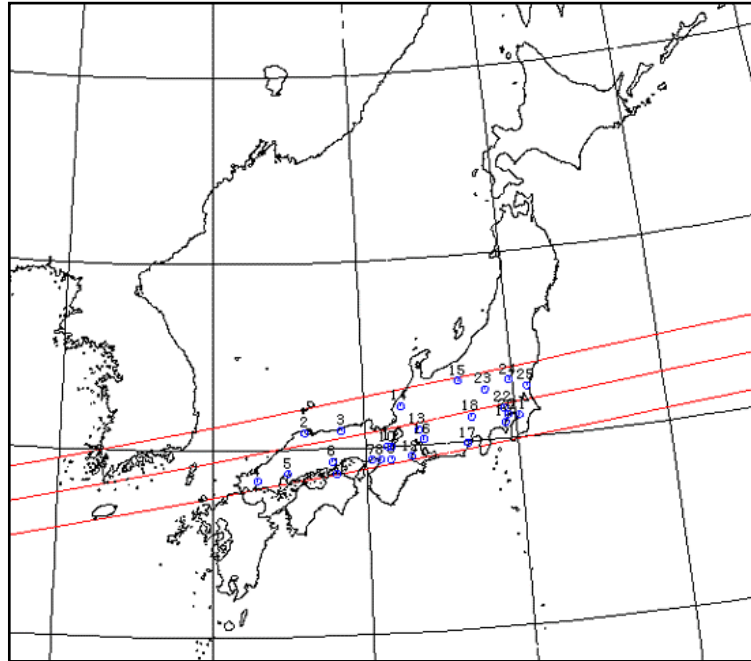


988年9月18日4時30分の東天 矢印は火星でその右下にレグルス
ステラナビゲータ8（アストロアーツ）より作成

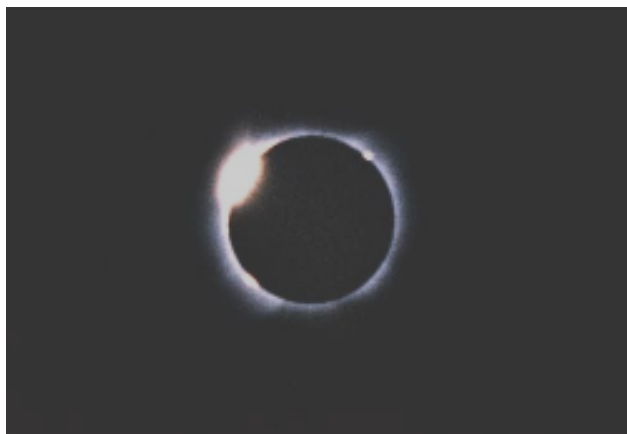
わが国最初の皆既日食記録

『日本紀略六』に天延三年七月一日（＝975年8月10日）に起こった日食の記録があります。空が墨のように暗くなり、多数の星が見え、鳥が乱れ飛んだというもので、皆既日食です。朝廷ではこのために大赦を行いました。白昼日が隠れるということはそれほどまでに忌々しき大事件だったのです。

天延三年七月一日辛未、日有レ蝕、十五
分之十一、或云皆既、卯辰刻皆虧、如二
墨色一無レ光、群鳥飛亂、衆星盡見、
詔書大ニ赦天下、大辟以下常赦所レ不レ
免者咸赦除、依二日蝕之變一也、八月廿
七日丙寅、



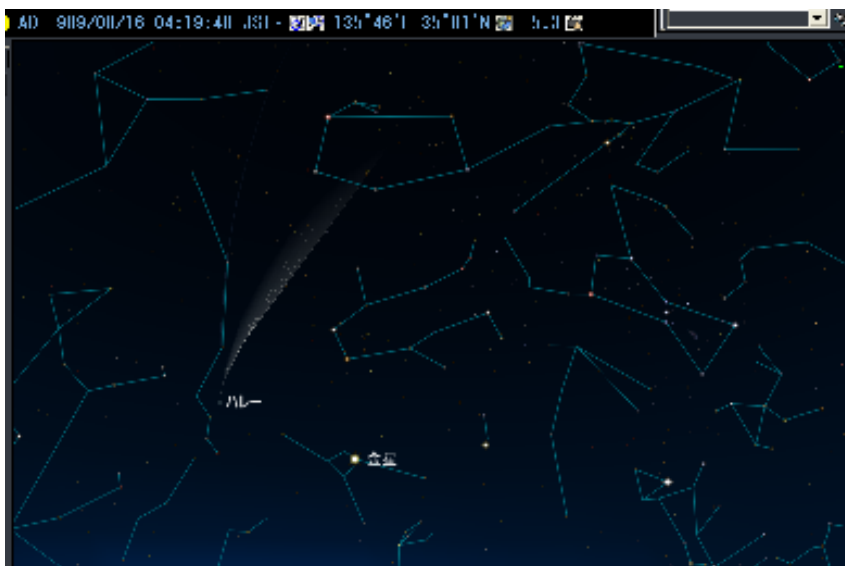
右図はこの日の日食図で皆既帯は中国・近畿・中部・関東まで広い範囲にわたり、西は中国、東はハワイまで伸びています。京都では6時52分に始まり、7時55分～58分の間皆既が見られたはずですが[8]。わが国最初の日食の記録は推古36年（628年）のもので、その後も大日食は何度か観測されていますが、皆既日食の記録はこれが初めてです。天文博士に任じられて間もない54歳の清明は実際に観測して、上左の文書の元になる報告書を書いたのではないのでしょうか。



ダイヤモンドリング
ダイニクアストロパーク天究館提供

改元をもたらした大彗星

『日本紀略後編九』に「永祚元年六月一日庚戌，其日彗星見東西天。七月中旬，通夜彗星見東西天」という記載があります。ユリウス暦で 989 年 7 月 6 日のことです。また『諸道勘文四十五』には「永延三年七月十三日彗星見東方，經数夜，長五尺許」と記され，これは同年 8 月 16 日のことです。実はこの年，永延三年は八月に永祚元年と改元されましたが，それは彗星の出現のためということが『扶桑略記』に記されています。彗星が現れるということはそれほどまでに忌々しき大事件で，この年の後にも 1097 年（永長⇒承德）1106 年（長治⇒嘉承）1110 年（天仁⇒天永）1145 年（天養⇒久安）などがあります。ヨーロッパ人ほどではないとしても，やはり長い尾を天空に引く彗星は不吉な兆し・恐怖の的だったようです。晴明が彗星を観測したと言う記録は残されていませんが，天文博士がこの天変に知らん顔とは到底考えられません。実際の観測は若い天文生が行ったが，改元の提案は晴明よりなされたものかもしれません。



989 年 8 月 16 日早朝の東天
ステラナビゲータ 8（アストローツ）より作成

この彗星は明らかにハレー彗星です。ハレー彗星は約 76 年周期で太陽の周りを回り，最古の確かな記録は中国の「史記・秦始皇本紀」にあります。始皇帝がまだ秦の青年王だった BC240 年のことです。わが国では『日本書紀』の天武十三年（684）の記録が初めてで，その次の 760 年を除いて毎回出現が記載されています。989 年の出現記録は宋，高麗および日本にあります。ヨ

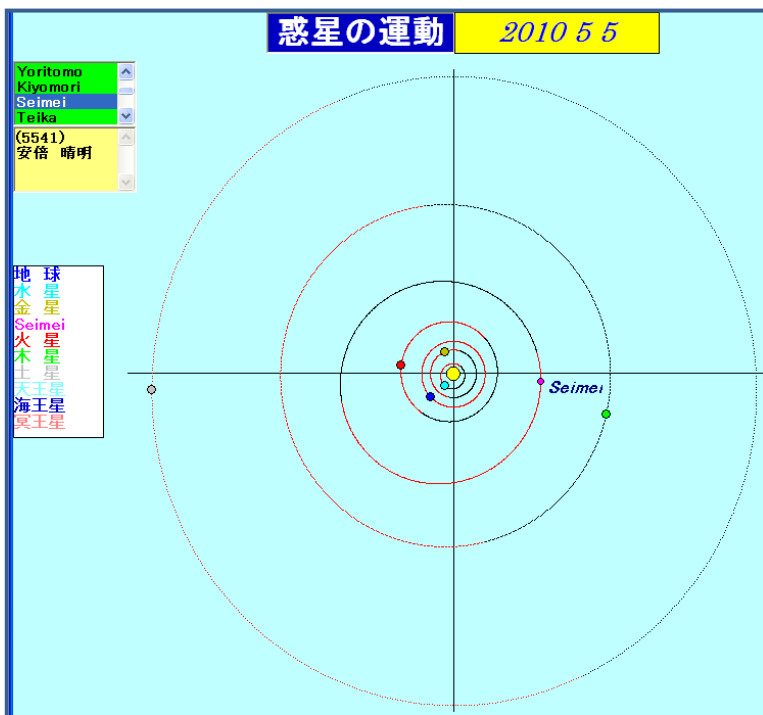
ーロッパには客観的な記録が少なく，次回 1066 年以降の出現記録はありますが，この年の記録は見つかっていないようです。[1]

この年の夏の天象を再現してみると 7 月初旬に日の出前，東天のおうし座に現れ，次第に東北へ移っていき，下旬にはふたご座に移ります。8 月中旬より足を速め，下旬にはしし座とおおぐま座の間を通り抜け，9 月上旬おとめ座に達し，下旬にはてんびん座に達します。9 月 6 日に近日点通過のため太陽と同方向となり，見えない日が数日あったがその後，日没後の西の空で眺められたはずです。[6]

近日点通過の前から彗星は太陽と地球の間に入っていますから，彗星の長い尾は地球を包み込んでいます。実際に，地球がハレー彗星の尾の中に入るという事件は 1910 年 5 月 19 日に起こりました。20 世紀の世でも大騒動になったそうです。

小惑星 Seimei

京都の堀川一条を上って西側、晴明の旧宅跡と言われるところに晴明神社があります。社伝によると、晴明の没後間もない 1007 年に創建されました。この神社なぜか東向きで（ほとんどの神社は南向きですが）五芒星のマークが特徴的です。晴明を祭った神社は京都以外にも茨城県・神奈川県・静岡県・愛知県・福井県・大阪府・岡山県など各地にあります。晴明伝承の地は全国津々浦々に多数あります。さらに地球外にもあるのです。火星と木星の間には多数の小惑星がありますが、その 5541 番星は晴明にちなんで「Seimei」と命名されています。1976 年に木曾観測所で香西氏（現佐治天文台長）によって発見されました。Seimei は、約 5 年半の周期で太陽の周りを回り、サイズはせいぜい 1 km くらいと推定されますが、地球や火星と同じく惑星の仲間です。



2010 年 5 月には、うお座で輝いているはずですが、18 等星なので大望遠鏡でないと見られません。太陽系には水金地火木土天海の他に無数の小惑星があり、2010 年 4 月末で約 23 万個が登録されています。そのうち固有名がついているのは 1 万個余で、その多くはギリシアをはじめ世界の神々や英雄たちの名前、また科学者や芸術家の名前、発見者の選んだ地名などです。京都の地名人名にちなむものとしては Kyoto(京都), Kwasan(花山), Nijo(二条城), Kamogawa(鴨川), Hieizan(比叡山),

Kukai(空海), Kiyomori(平清盛), Yoritomo(源頼朝), Teika(藤原定家), Yukawa(湯川秀樹), Shotaro(宮本正太郎) などがあります[6]。図は 2010 年 5 月 5 日の惑星配置で軌道は内側から水星・金星・地球・火星・Seimei・木星・土星で、すべて反時計回りに公転しています。

安倍晴明は豊富な天文知識を生かして、藤原兼家・道長など権力者に利用されたりまた利用したりして、当時の普通の人々の倍以上も生きたのですから、一般にはマジシャンと映ったことでしょう。彼は『大鏡』『三代実録』『続日本紀』などの史書、『今昔物語』『宇治拾遺物語』『日本霊異記』などの物語、歌舞伎・義太夫などの芸能、さらに歌川豊国・葛飾北斎の浮世画などによって、千年間も人々を惹きつけ語り継がれてきました。その間に天文博士としての晴明像は忘れられ、マジシャンとしてのイメージ

が出来上がったのではないのでしょうか。数年前から、彼はマンガ、TV、映画、舞台などのヒーローとして一躍有名になりましたが、千年前の天文学者としての安倍晴明を忘れないでほしいものです。

参考文献

- [1] 長谷川一郎 「ハレー彗星物語」 恒星社厚生閣 1984
 - [2] 斎藤国治 「古天文学」 恒星社厚生閣 1989
 - [3] 斎藤国治 「歴史と旅」 2001年6月号
 - [4] 作花一志・中西久崇 「天文学入門」 オーム社 2001
 - [5] 「安倍晴明と陰陽道展」 京都文化博物館 読売新聞社 2003
 - [6] 作花一志 <http://www.kcg.ac.jp/kcg/sakka/>
 - [7] 臼井 正 <http://homepage3.nifty.com/silver-moon/>
 - [8] 日食月食星食情報データベース <http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~x10553/>
- 画像提供 晴明神社
イラスト提供 西岡季美 楽喜



2010年5月

京都情報大学院大学 作花一志

禁無断転載